

博士論文要旨

氏名	角谷 由美子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲 16 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 19 日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第 5 条 1 項の規程による
学位論文題目	D. H. Lawrence's Confrontation with Eugenics: From Encounter with the Pre-Darwinian Theories

論文の要旨

本論文は英国作家 D. H. Lawrence (1885-1930) における生物進化論から諸々に派生した科学、及び言説の受容を考察するものである。具体的には、ダーウィン以前、すなわち 19 世紀前半までにすでに成立しつつあった進化説から、世紀末、ダーウィン理論から派生する形で興隆した優生学思想を整理、提示し、科学思想に対する作家の文学的反応を読み取る試みである。

第一部は、後に本論で焦点を置くことになる「優生思想」の前段階として、まずは初期進化論と社会有機体論の影響をロレンスの初期作品において考察する。第 1 章では、英国社会学者 Herbert Spencer (1820-1903) がダーウィン進化論を基に提唱した社会有機体論に対するロレンスの反応を *Sons and Lovers* (1913) を取り上げ分析する。ロレンスとスペンサー理論における「個（個人）」に対する認識とのずれに焦点を当てる。第 2 章は、*The Rainbow* (1915) と *Women in Love* (1920) における度重なる Alfred Tennyson (1809-92) からの引用語句をもとに、19 世紀詩人がダーウィン以前の進化論に対し示した葛藤に満ちた反応と、20 世紀作家の「進化」に対する憂思を観察する。第 3 章では、Charles Darwin (1809-82) の生物進化論の着想に大いに貢献したと言われる地質学者 Charles Lyell (1797-1875) とロレンスの類似性を検証する。ライエルが主張した斉一説における「過去」と「現在」という時間軸の捉え方や、連続と断絶、神学と科学、などという二項対立を成す概念の捉え方においてロレンスとの類似点が発見されることを同じく *The Rainbow*、*Women in Love* において示す。

第二部では、1900 年代から 20 年代に渡るロレンスの優生思想を支持するような発言を数々取り上げることにより、ロレンス研究における優生学の重要性を強調する。消極的優生学への賛同、延いては人間嫌いとも取れる発言の多くは、作家の帝国主義、及びヨーロッパ文明に対する批判と否定に端を発するものであるが、本パートでは優生学上においては頹廢、退化、もしくは「不適者(unfit)」と見なされる以下の三つの現象<同性愛、非白人人種、病気>についてロレンスはどのように対峙したかということに着目する。第 4 章では、1912 年に始まっ

た作家の数度に渡るイタリア旅行が男同士のホモソーシャルな結びつきを肯定し、以後の作風に大きく影響したと位置づけ、イタリア旅行記三部作 *Twilight in Italy* (1916)、*Sea and Sardinia* (1921)、*Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays* (1932) を解説する。第 5 章でも引き続き作家が 1920 年代に訪れたイタリア、アメリカ、メキシコでの土着民族やインディアンとの出会いが *The Lost Girl* (1920) や *The Plumed Serpent* (1926) における非白人（英国人）人種への再評価に繋がることを示す。第 6 章では、Thomas Hardy (1840-1928) による *Jude the Obscure* (1895) に潜む世紀末を代表する病「梅毒」と *Sons and Lovers* と比較しロレンスの描く 20 世紀的現代の「病」がどのように表象、定義されているか検討する。

第三部では、優生学的見地に囚われることなく作家自身が 20 世紀現代社会における「不適者(unfit)」を再定義した後、最終的にロレンスが優生学に対し下した是非を論じる。第 7 章は、*The Plumed Serpent* はロレンス作品の中でも男性優位を誇る小説 (leadership novel) として認識されているが、本作は母性文化に根付いた小説であることを心理学的分析、及び宗教的背景から主張する。「母性文化」の発達は優生学支持者たちの間では歓迎された社会の在り方であるが、それはロレンスが支持できるものではない。作家の理想は「母性」ではなく「女性性」の回復と実現であることを論じる。第 8 章では、ロレンス自身、性を言語化する際、当時の性の言説から解放されることはなかったが、優生学とは、詰まるところ「性」の干渉と管理を正当化する学問であることについて、最終小説となる *Lady Chatterley's Lover* (1928) においてどのような抵抗を示したか考察する。第 9 章は、最終的にはロレンスと優生学思想は相容れないことを論証するが、彼が優生学支持者と捉われかねないような過激な発言を繰り返した背景には「平等」概念への不信感があったことをエッセイ “Democracy” (1919) や “Education of the People” (1920) から分析する。ある意味、生命の「不平等」を前提とした優生思想への傾倒は自然なことなのである。しかし、本章後半では、いかに作家が「労働」という人間の生命の根源を担う原始的な行為に重きを置き、社会的弱者である労働者に寄り添う立場を明らかにしたかということに焦点を当てる。

作家人生始まって間もない頃からおよそ 20 年に渡りロレンスは折に触れ、優生学的であると解釈されるような発言を繰り返してきたが、それは決して作家の人生哲学を表すものではない。確かに、本論文、前半の考察の通り、初期作品においては、生命の神秘を視覚化し「進化」という概念を確信させる科学を肯定する姿も見受けられた。労働者階級出身という自身の境遇から、生命の強弱が存在することも承知している。しかしながら、最終的に D. H. Lawrence という作家は科学により生と性が管理されることに反発し、「進化」よりも「原始」に、強者よりも弱者の立場に立ち戻った。本論文は、この原点に「回帰」する作家の姿勢に「進化」と「成長」が認められると結論付けるものである。

博士論文審査結果の要旨

2015年2月24日(火)午後3時より、博士論文の公開発表、口頭試問を実施した。提出者による論文の概要報告、審査委員およびフロアを含めて質疑応答がなされた前半の公開審査を含め、審査は午後7時20分頃終了した。

本研究は、イギリスの作家D.H.ロレンスが優生学思想にどのように対峙したかという問題意識を出発点として、19世紀後半から興隆した優生学諸思想を中心に、それが派生する母体となった進化論や関連する進化をめぐる科学的諸言説を含めてロレンスの文学的反応を分析した成果である。

序章で、進化思想のロレンスへの影響に関する研究史を整理し、優生学思想の歴史的展開と基本的アプローチを説明、第一部では、優生学思想に至るまでの進化思想のロレンスへの受容を論じる。具体的には、ハーバード・スペンサーの社会的有機体論、ダーウィン理論、進化論に影響を与えた地質学者ライエルの斉一説を取り上げ、*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love*等の小説作品を中心に、ロレンスの進化をめぐる体系的科学言説への反応を探る。スペンサーとの比較では、社会的進化説への傾倒とともに個の認識に関しては反発があること論じる。19世紀の詩人テニソンのダーウィン進化論をめぐる反応の比較においては、ロレンスは退化論への憂慮がみえることを指摘する。またライエルの斉一説については、ロレンスへの影響可能性を、類似する二項対立的概念を中心に論じ、ロレンスには生命の進化をめぐる体系的科学論への傾倒があることを結論づける。第二部では、ロレンスの優生学思想への関心と反発に注目し、ロレンス文学研究における優生思想の重要性を論じる。まず、メンデルの遺伝法則論等の影響下、優生学思想が、ノルダウの退化論、ガルトンの遺伝論を中心に、退化排除と優生保護という二つの方向へと展開していく背景を整理し、次に、ロレンスのホモセクシュアリティや非白人人種、病に関する排除的態度に、消極的優生学思想からの影響を指摘する。一方、*Twilight in Italy*, *Sea and Sardinia*, *Sons and Lovers*等の1920年代までの諸作品には、排除的優生学思想とは相反する、男性同士の絆、あるいは非白人人種への共感的関心が伺えることを論じ、ロレンスの優生学思想に対する揺れ、葛藤を論じる重要性を明らかにする。トマス・ハーディの小説作品との比較論では、世紀末を代表する「梅毒」に焦点をあて、病をめぐる表象と定義の時代差に論及する。第三部は、1920年代以降のロレンスの積極的優生学思想への葛藤に焦点をあて、作家の最終的な立場を論じる。まずハブロック・エリスやメアリ・ストープスの優生保護的衛生学思想に対するロレンスの共感と反発の諸相を論じ、続く *The Plumed Serpent* や *Lady Chatterley's Lover* 論において、ロレンスは母性や避妊という優生学の中心的関心を取り上げつつも、むしろ優生学における母性中心主義や、性の国家管理主義を否定しているとし、ユングの原型論やフーコー、アガンベンの生権力、生政治理論を用い、作家独自の「原始的」なものへの回帰、生命主義の展開があることを論証する。また最後の章では、ロレンスが最終的に優生学思想を否定した経緯に、民主主義思想へ再考があったとして、

特に晩年のイギリスへの帰国でなされたロレンスの労働者に対する再評価を、アレントの労働論を逆説的に用いて敷衍し、ロレンスは最終的に、生命の進化を説く優生学ではなく、進化よりも原始へ、また優生学思想の選民的姿勢を否定し、弱者に寄り添うことを選ぶと結論づける。

以上のような論旨で展開される論文に関して、口頭試問では、次のような問題点等が指摘された。第一部二章のライエルのロレンスへの影響論では、ライエルとロレンスの地層的時間の捉え方の類似性等は興味深い指摘であるものの、影響関係の実証的論証力が乏しい。また第二部で使われた、ホモセクシュアリティとホモソーシャルという概念、第三部の母性原理を用いて論じた部分の母と女性の概念等については、整理がやや不十分であり、議論展開の細部に混乱がある。また第三部におけるハーディの *Jude the Obscure* と *Sons and Lovers* の病の表象比較は図式的である、などである。とはいえ、第三部九章の *Lady Chatterley's Lover* 論において、フーコー、アガンベンを援用し、ロレンスの反優生学的姿勢を、生権力への反発と捉え、ロレンス自身の主張をむき出しの生としての *zoe* と関連づけてゆく部分は、やや議論を急ぎすぎた感があるものの、ロレンス文学の特質をよく浮き彫りにする鋭い論考で、秀逸とのコメントもあった。

このように議論展開の周到性、資料比較の際の厳密性、細部資料の読み込み等、今後さらに深めてほしい点も少なくない。しかし、学界において、優生学思想に対する受容に着目してロレンス文学を読み解く試みは現在ほとんどない状況であることと、また優生学思想をめぐる広範な文脈的資料読解、比較文学的手法や、心理学的、哲学的諸理論を活用した多角的な論考により、進化論的科学思想からの影響から原点回帰へと立ち戻る、いわば進化とは逆方向へ向かうロレンスの文学的成長を跡付けた本論文の成果は、博士（文学）学位論文としての条件を満たしているものとして合格と判定する。

2015年3月2日

主査 溝口 薫 教授

副査 和氣 節子 教授

副査 新井 英永 教授

熊本大学文学部